

TOP MUSEUM

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

「愛について アジアン・コンテンポラリー」展

I know something about love, asian contemporary photography

2018年10月2日(火)～11月25日(日)

October 2 (Tue.) to November 25 (Sun.), 2018



チェン・ズ 《蜜蜂 #065-01》〈蜜蜂〉より 2010年 作家蔵 © Chen Zhe

展覧会概要

発展と変容の著しいアジア。現代写真・美術の世界においても、アジアに向けられる視線はますます熱くなっています。本展は家族、セクシュアリティ、ジェンダーのあり方に焦点をあて、変わりゆくアジアの現在をご紹介します。出展作家は、中国、シンガポール、台湾、韓国、在日コリアン、そして日本の女性アーティストによって構成されています。国も年齢もアーティストとしてのキャリアも異なる彼女たちの作品は、アジアン・コンテンポラリーとして高い評価を得ているという共通点以上に、女性の価値観が様々に変容するアジアの“今”を共有しています。彼女たちはそれぞれの現実を直視し、それぞれの“今”に思いを巡らせながら走り続けています。その眼差しの奥底にあるもの、それは「愛について」。

出品作家 計6名／出品点数 約80点

金仁淑(キム・インスク) [在日コリアン]、キム・オクソン(金玉善) [韓国]、ホウ・ルル・シュウズ (侯淑姿)[台湾]、チェン・ズ (陳哲) [中国]、ジェラルディン・カン [シンガポール]、須藤 絢乃 [日本]

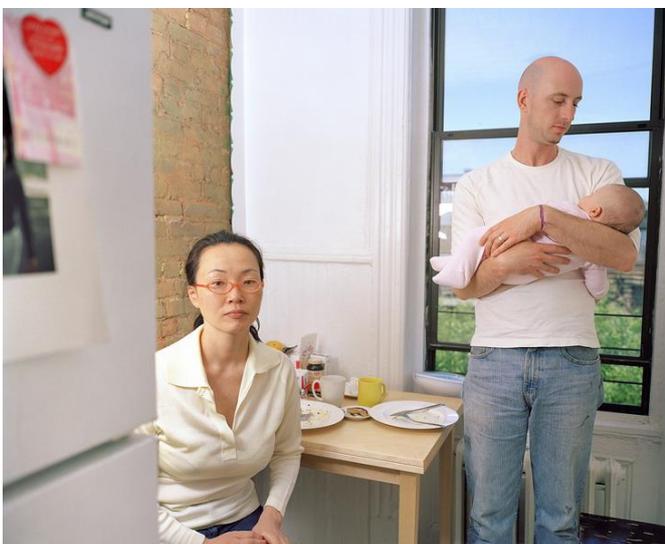
金仁淑 (キム・インスク) Kim Insook (在日コリアン b. 1978 -)



キム・インスク 《息子と私》〈サイエン：はざまから〉より
2008年 東京都写真美術館蔵 ©金仁淑

1978年大阪生まれ。在日コリアン3世。ビジュアルアーツ専門学校写真学科を卒業後、2003年に韓国の漢城大学芸術大学院西洋画科写真映像コースに留学し、2005年同大学院修了。現在、ソウルを拠点に制作活動を展開している。大阪の朝鮮学校をテーマにした作品〈sweet hours〉(2001年-)や、在日コリアンの家族の肖像〈サイエン：はざまから〉(2008年-)など、いくつもの文化の狭間に生きる人々の、アイデンティティ、コミュニティ、民族、家族の問題を浮き彫りにしている。国内外の芸術祭やグループ展への招聘も多く、主な展覧会に「ゴー・ビトゥイーンズ展：こどもを通して見る世界」(森美術館他、2014-15年)、「第16回河正雄ヤングアーティスト招聘展〈光2016〉」展(光州市立美術館、2016-17年)、「Family Report」展(京畿道美術館、2017年)、「#Selfie - The people who take picture by themselves」展(SAVINA美術館、ソウル、2017年)など。

キム・オクソン(金玉善) Kim Oksun (韓国 b. 1967 -)



キム・オクソン 《ヒロヨとマイケル 2》〈ハッピー・トゥゲザー〉より
2004年 東京都写真美術館蔵 ©Oksun KIM

1967年ソウル生まれ。1996年弘益大学産業美術大学院写真デザイン専攻修士課程修了。韓国・済州島に住む外国人と結婚したカップルを撮った〈ハッピー・トゥゲザー〉(2000-2004年)のシリーズで知られる、韓国を代表する写真家の一人。異文化との葛藤や調和、アイデンティティというテーマは、〈ハメルのボート(Hamel's Boat)〉(2008年)で始まり、済州島に暮らす外国人のポートレート〈ノー・ディレクション・ホーム(No Direction Home)〉(2009-2011年)、済州島に持ち込まれて根付いた

植樹のシリーズ〈輝くもの(The Shining Things)(2011年-)〉等にも引き継がれている。2017年に第8回イルウー写真賞(大韓航空)、2016年に第15回東江写真賞(東江国際写真フェスティバル)を受賞。個展に「Museum of Innocence」展(コウン写真美術館、釜山、2016年)、「The Shining Things」展(ハンミ写真美術館、ソウル、2014年)、「No Direction Home」展(ハンミ写真美術館、2011年)他多数。国内外の芸術祭やグループ展にも多く招聘され、第1回済州島ビエンナーレ(2017年)、「パブリック・トゥ・プライベート：1989年以降の韓国美術における写真」展(国立近現代美術館、ソウル、2016年)、「カオティック・ハーモニー」展(サンタバール美術館、2010年)他多数。済州島在住。

ホウ・ルル・シュウズ (侯淑姿) Hou Lulu Shur-Tzy (台湾 b. 1962 -)



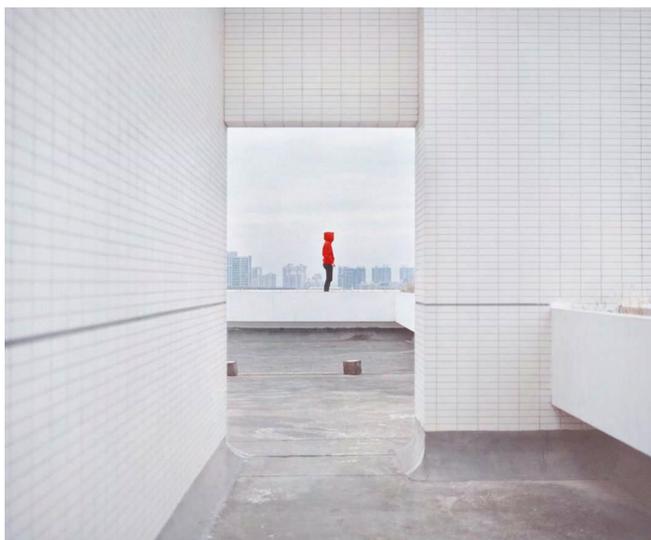
1962年台湾・嘉義生まれ。1985年国立台湾大学卒業(哲学専攻)。1992年ロチェスター工科大学(アメリカ・ニューヨーク州)で芸術学修士号取得。2004年より現在まで国立高雄大学クリエイティブ・デザイン・建築学部助教として教鞭を執っている。自分自身を被写体に女性に向けられる視線や期待される役割について風刺した〈窺 Take a picture, it lasts longer〉(1996年)、台湾の紡績工場で働く女性たち取材した〈青春編織曲 Labors and Labels〉(1997年)など、最初期の作品からジェンダーやアイデンティティ、社会階級や民族をテーマに制作している。特に2004年から始められた〈亞洲新娘之歌 Border-crossing/ Cultural Identities - Song of Asian Foreign Brides in Taiwan〉(2005年、2008年、2009年)は、ヴェトナムやカンボジア、タイやインドネシアから台湾に嫁いだ外国人花嫁をテーマに、写真と言葉で綴った三部作として彼女の代表作となり、2010年に高雄市立美術館で個展が開催された。同じ写真を併設し、一方の写真を画像処理した上で被写体の言葉を添えた彼女の独特の「二重視線 double-gaze」の手法は、高雄の基地の街をテーマにした最新作〈高雄眷村三部曲 A Trilogy on Kaohsiung Military Dependents' Villages〉に引き継がれ、2017年に同じ高雄市美術館で個展が開催され好評を得た。台湾にとどまらず、アメリカ、ヨーロッパ、日本、香港等の展覧会に招聘されている。

ホウ・ルル・シュウズ

《尚久菊 (シャン・ジョウジュ) と陸鐸 (ルー・ドウオ) 01》
 〈高雄眷村三部曲 エピソード1：ここは私たちの出会う場所 (勵志新村)〉より 2012年 作家蔵

©Lulu Shur-Tzy Hou

チェン・ズ (陳哲) Chen Zhe (中国 b. 1989 -)



チェン・ズ 《蜜蜂 #065-01》〈蜜蜂〉より
2010年 作家蔵 © Chen Zhe

1989年中国・北京生まれ。2011年アート・センター・カレッジ・オブ・デザイン(ロサンゼルス)卒業(写真専攻)。自傷行為をテーマにした作品〈我慢できる(The Bearable)〉で第3回三影堂撮影大賞受賞(2011年)、連洲写真フェスティバル新撮影賞(2011年)、Xitek・ニュー・タレント・アワード(2015年)、また、2016年には写真集『〈蜜蜂〉と〈我慢できる〉(Bees & The Bearable)』でカッセル・フォトブック・フェスティバルでベスト・フォトブック・オブ・ザ・イヤーを受賞するなど、現在、最も注目されている中国の女性アーティストである。現在進行形の最新作〈Towards Evening: Six Chapters〉では日記や手紙を素材に言葉とイメージの問題をテーマにしている。

ジェラルディン・カン Geraldine Kang (シンガポール b. 1988 -)



ジェラルディン・カン 《08:33》
〈ありのまま〉より 2010年-2011年 作家蔵
© Geraldine Kang

1988年シンガポール生まれ。2011年シンガポールの南洋理工大学芸術学部卒業(the School of Art, Design and Media, Nanyang Technological University)。現在、ニューヨークのパーソンズ・スクール・オブ・デザイン大学院に在学中。大学のプロジェクトとして制作したファミリー・ポートレート〈ありのまま(in the raw)〉(2010-2011年)で注目を浴び、卒業後もシンガポール、ドイツ、オランダ、ニューヨークなどのグループ展に招聘されるなど、若手の注目作家としてきわめて旺盛な制作活動を展開している。主な作品に自分と祖母の関係とその死を描いた〈ふたつの寝室(Of two bedrooms)〉(2010-15年)、セラングーン川の夜の工事現場をテーマにした〈リズムを刻むように静かに(As quietly as rhythms go)〉(2014年)、53人のアーティストやキュレーターとイメージについて共同制作した写真集『左から右へ(Left to Right)』(2016年)、シンガポールのゴミ収集や移民労働者に焦点をあてた〈夜はどうやって寝ますか?(How do you sleep at night?)〉(2017年-)他。

須藤 絢乃 Sudo Ayano (日本 b. 1986 -)



須藤絢乃《無題》〈幻影 Gespenster〉より 2013年 作家蔵
©Ayano Sudo/須藤絢乃

1986年大阪生まれ。2011年京都市立芸術大学大学院修士課程修了。在学中にフランス国立高等美術学校留学。2009年京都市立芸術大学作品展市長賞受賞。ミオ写真奨励賞2010にて、森村泰昌より審査員特別賞受賞。〈幻影 Gespenster〉でキャノン写真新世紀2014グランプリ受賞。主な作品に、性別にとらわれない理想の姿に変装した自身や友人を写した〈メタモルフォーゼ (Metamorphose)〉(2011年一)、実在する行方不明の女の子に扮して撮影したセルフポートレート〈幻影 Gespenster〉(2013—14年)、他人が自分のように見えてくる現象をモチーフにした〈面影 Autoscopy〉(2015年)などがある。1839當代藝廊(台湾、2011年)にて初個展開催後、国内外の展覧会やアートフェアに出展。主な展覧会に「写真都市 —ウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たち」展(21_21 design sight、東京、2017年)他多数。

展覧会図録

『愛について アジアン・コンテンポラリー』

本展の開催に合わせて、展覧会図録を発行します。

ステートメント、図版：金仁淑、キム・オクソン、ハウ・ルール・シュウズ、チェン・ズ、ジェラルディン・カン、須藤絢乃(以上、出品作家)

論考テキスト：笠原美智子(石橋財団ブリヂストン美術館 副館長、前・東京都写真美術館事業企画課長、本展企画者)、小勝禮子(近現代美術史・美術批評)、山田裕理(東京都写真美術館学芸員)

編集・発行 東京都写真美術館

開催概要

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞

協賛 東京都写真美術館支援会員／凸版印刷株式会社／資生堂

会場 東京都写真美術館 2階展示室

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00) ※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日、ただし10月8日(月・祝)は開館、10月9日(火)は休館

観覧料 一般 800(640)円、学生 700(560)円、中高生・65歳以上 600(480)円

※()は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

本展の見どころ

アジアの女性アーティスト 6 名による新作・話題作

国や地域を代表するキャリアの長いアーティストから、日本初出展となるアーティストまで、6名の女性作家を紹介します。女性の価値観がさまざまに変容するアジアにおいて、彼女たちはそれぞれの現実を直視し、“今”に思いを巡らせながら制作を続けています。本展のために制作された最新作や、作家を代表する話題作を一堂に紹介。豊かな表現の数々を展覧できる貴重な機会です。

家族について、故郷について、自分の存在について

写真で見つめるさまざまな「愛について」

グローバル化によって、価値観が多様化した情報社会。何万キロ遠くに住んでいても理解し合えることもあれば、となりにいるのに、驚くほど意思疎通ができないこともあるでしょう。

6名のアーティストたちも同じです。伝統や文化、結婚、異国で生きる不安と自由、ジェンダーやアイデンティティ、社会階級と民族、小さな個人の歴史、家族、そして、自分の存在。彼女たちは、それぞれのテーマに丁寧な思索をかさねています。価値を認め、強くひきつけられる気持ち。彼女たちの表現のコアにある「愛について」、あなたも共感できるはずです。

2名のキュレーターによる、写真表現への愛と未来

本展の企画者は、笠原美智子（石橋財団ブリヂストン美術館副館長、前・東京都写真美術館事業企画課長）と、山田裕理（東京都写真美術館学芸員）です。世代もキャリアも異なる2名のキュレーターは、6名のアーティストについて、それぞれの価値観を持ちながら展覧会をつくりあげています。その違いの融合も本展の見どころです。アーティストと同じように、キュレーターもまた、並々ならぬ写真表現への愛と信念をもって、考察を続けています。

出品作家をもっと知るイベントを多数開催

音声ガイドや 展覧会公式サイトも！

展覧会
公式
サイト

www.aboutlove.asia

展覧会公式サイトオープン！

特別インタビュー映像や、専門家によるカルチャー連載など、多彩なコンテンツで、作家と作品の背景を探ります。

Twitter とインスタグラムでも情報を日々発信します。

音声
ガイド

変わりゆくアジアの“現在（いま）”を読み解く音声ガイドです。

ナレーター 小野大輔（声優）

貸出価格 540 円（税込）※お一人様一台につき。
所要時間 約 20 分
ガイド制作（株）アコースティガイド・ジャパン

《プロフィール》

小野大輔（おの・だいすけ）
1978 年生まれ、高知県出身。主な出演作は『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズ（空条承太郎）、『宇宙戦艦ヤマト 2199』（古代進）、『おそ松さん』（松野十四松）、『進撃の巨人』（エルヴィン・スミス）など。アニメに限らず、映画の吹き替えや歌手としても活躍。第 2 回声優アワード助演男優賞、第 4 回・第 9 回声優アワード主演男優賞を受賞。



関連イベント

出品作家によるリレートーク

① ホウ・ルル・シュウズ×キム・オクソン

日時 2018年10月4日(木) 18:00-20:00

② チェン・ズ×ジェラルディン・カン

日時 2018年10月5日(金) 18:00-20:00

③ キム・インスク×須藤絢乃

日時 2018年11月17日(土) 15:30-17:00

会場：東京都写真美術館 1階スタジオ

定員：50名(整理番号順入場／自由席) 入場無料／要入場整理券

*当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します

*逐次通訳付き(日本語)

ゲスト対談

小勝禮子 (近現代美術史・美術批評)

笠原美智子 (石橋財団ブリヂストン美術館 副館長、前・東京都写真美術館事業企画課長、本展企画者)

日時：2018年10月13日(土) 15:30-17:00 会場：東京都写真美術館 1階スタジオ

定員：50名(整理番号順入場／自由席) 入場無料／要入場整理券

*当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2、第4金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。

スペシャル・インタビュー

「愛について アジアン・コンテンポラリー」は、現代の写真家を数多く紹介してきた東京都写真美術館でも、初めての試みとなるアジアの女性作家によるグループ展。出展作家たちの出身国だけでなく、ベテランから若手まで世代は多岐にわたり、作品のスタイルもまちまちだが、この展覧会は一つの大きな問題意識のもとに構成されているという。企画者である笠原美智子氏に、“愛について”という言葉に込めた思いや、招聘した作家について伺った。



笠原美智子

1957年長野県生まれ。1983年明治学院大学社会学部社会学科卒業。87年シカゴ・コロンビア大学大学院修士課程修了（写真専攻）。東京都写真美術館、東京都現代美術館にて学芸員を務め、現職は公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館副館長。日本で初めてのフェミニズムの視点からの企画展「私という未知へ向かって 現代女性セルフ・ポートレート」展（91年）ほか、ジェンダーの視点からの展示を多数企画。著書に『ジェンダー写真論 1991-2017』（里山社、2018年）ほか多数。本展企画者。

ー展覧会名にある“愛について”とは、こういった意味なのでしょう？

人間同士の関係、例えば親子や恋人など、さまざまな関わりを持ちながら私たちは生きていますが、疎外された関係に悩まされることもあれば、“他者の視線”から免れない環境に置かれてもいるわけです。私に関していえば、「私という未知へ向かって 現代女性セルフ・ポートレート」展（1991年）をこの東京都写真美術館の学芸員として初めて企画したときから、特にジェンダーの問題に注目した女性作家の展覧会を手がけてきましたが、これまで取り上げてきた作家たちが何を考えて作品を制作しているのかをあらためて考えてみたときに、この“愛について”という言葉が出てきたんです。ここに、人間関係にまつわること全てが含まれているのではないかと思いました。

ー今回、アジアの女性作家を取り上げた理由は？

はじめに矛盾するようなことを言ってしまいますと、これだけグローバリズムと情報化が徹底して進んでいる現代では、ある地域を区切って土地の特性を浮かび上がらせることは不可能に近いと思っています。しかし、そういう状況でありながら、日本ではアジアの作家が紹介される機会が非常に少なく、特に女性作家の作品を見る機会は極めて限られているといえます。

ーアーティスト全体に占める女性と男性の比率からしてみたら、明らかに偏っていますね。

日本のジェンダーギャップ指数（世界経済フォーラムが2017年11月公表）が144カ国中114位だというような情報は、たくさん入って来るわけです。しかし、現状を変えたくない人々には無視されてしまう。だから、問題意識を持っている者や困っている当事者が自覚的に声を上げていかなきゃいけないんです。この展覧会は、そういった状況に対する問題提起でもあります。

ー出展作家について教えてください。まず、韓国で活躍されている作家さんが2名いらっしゃいますね。

キム・オクソンは韓国の中でも中堅からベテランに位置付けられる作家で、ドイツ人の方と結婚して済州島に暮らしながら作品を制作しています。〈ハッピー・トゥゲザー〉（2000-04年）では、韓国の女性と外国人の夫やパートナーとのカップルを被写体に、彼らの間にある緊張関係、一つの文化の中に異なるものが入って来たときに起こる衝突や違和感といったものを視覚化するという、かなり難しいことを行っています。

非常にプライベートな動機から始まった彼女の作品制作ですが、今は濟州島の植生を被写体に、外来種が根づいていくということの意味を〈輝くもの〉(2011年-) シリーズで撮り続けています。

金仁淑は在日韓国人として大阪で育ち、朝鮮学校で教育を受けた作家です。自身のアイデンティティが日本にあるのか韓国にあるのかという問題が常につきまとうわけですが、それを彼女はポジティブに受け取っている。〈リアルウェディング〉(2008年-)では、自分の結婚式で披露宴を日本と韓国で行い、それを映像と写真で撮って、一つの作品にまとめているんですが、創作して盛り込んだいかにも風習のような演出を、作品を見た方は昔からある本当の韓国のしきたりだと思ってしまったそうです。伝統や風習は、常に変まっていくものだというのを自覚的に作品に取り込んでいる。在日韓国人の方々はレッテルを貼られ、常に政治的に評価されてしまう立場に置かれていますが、彼女の作品はそれを取り払う作業でもあるんですね。

ーホウ・ルル・シュウズは台湾を代表する作家ですね？

この展覧会で取り上げる〈高雄眷村三部曲〉シリーズは、眷村(けんそん)と呼ばれる元兵士たちの村をドキュメントした作品です。作家のステートメントによると、第二次世界大戦後に中国から、当時の国民政府と共に台湾に渡った軍人とその家族のために、政府が用意した村のことを眷村と呼ぶのだそうです。そして、十数年ほど前には、それを取り壊す法律ができた。彼らは過酷な歴史に翻弄され続け、二重、三重に故郷を奪われるという状

況になっているんですね。マジョリティの側にいると思われた軍人が、結果的にマイノリティの側に押しやられているという、そういう歴史的な出来事を記録しておかなければならないと、彼女はここ十年くらい撮り続けているんです。

ー中国の作家チェン・ズは、日本の若者にとっても珍しくない自傷行為を作品にしていますね？

彼女は中国の北京に在住する30代手前の作家で、自身がずっとリストカットिंगをしてきたことから、〈蜜蜂〉シリーズ(2010-17年)ではセルフ・ポートレートだけでなく、同じ行為をする人たちの写真に撮っています。自傷というのは、実は死から遠ざかる、つまり自分自身を生かすための行為なんですね。中国社会が抱える問題、女性の置かれている位置とか働き方とか、プレッシャーというのに対しての一つの異議申し立てを作品で表明していますが、彼女は若者たちの自傷を中国だけの問題だとは思っていないんです。

ーシンガポールのジェラルディン・カンは、若いながらキャリアの長い作家だそうですね？

彼女はいろいろな種類の作品をつくっていて、新しい作品になるほど社会性を帯びるんですが、今回は学生時代の作品〈ありのまま〉(2010-11年)を取り上げています。この作品は演出された家族の肖像で、祖母や母親、ずっと一緒に暮らしている家政婦の女性、さらに父親などに指示を出していろいろな場面をつくっているんですが、そのプロセスが一番大事なんです。家族の関係がうまくいってたらこういう作品はつくりたくないし、逆にこれをすることによって、家族の自分に対する理解と、自身の家族に対する理解に貢献しているわけです。

ー現在の展覧会担当の山田裕里学芸員が日本人作家の須藤絢乃を加えています。実際に行方不明になった少女たちの残された情報をもとに、自身がなり替わって撮影したセルフ・ポートレート作品〈幻影 Gespenster〉で、2014年度写真新世紀でグランプリを受賞した新世代の作家さんですね。

彼女が選ばれて、とてもよかったと思っています。私が東京都写真美術館を退職した後、展覧会を引き継いだのは平成生まれの学芸員ですが、同世代の作家に対する理解は60歳の私とは違うと思うんです。この展覧会に新旧二つの理解が入ったことで、幅広く何重にも意味を持たせることができたと思います。

(2018年6月 インタビューと文 富田秋子)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当まで連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。
ご掲載にあたっては事前に内容の確認をさせていただきます。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel 03-3280-0035 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>
展覧会担当 山田裕理 y.yamada@topmuseum.jp 田坂博子 h.tasaka@topmuseum.jp
広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp